

アナキストの文学

秋山 清

麦社

アナキストの文学

秋山 清著

麦社

¥240

目次

1章 アナキストの文学とアナキズムの文学 1

2章 アナキストの文学 30

宮嶋資夫 / 安成二郎 / 和田久太郎 / 中浜哲 / 新居格
/ 飯田豊二

3章 昭和の詩人群 65

(付) 大正・昭和のアナキズム系文芸資料

あとがき 89

1章 アナキストの文学とアナキズムの文学

アナキズムの文学と名づけられる文学、あるいはその運動があったのか、という問題がある。たとえばマルクス主義(プロレタリア)文学運動というものがあつた。それに対してアナキズム文学の運動というものもあつたという考え方は必ずしも不当ではないであろう。事実そう名づけ得るものは昭和十年までのある時期には、ささやかながら存在した。しかしそれはマルクス主義プロレタリア文学(以下「プロレタリア文学」とする)が在つたような姿で、アナキズム運動の指導下に置かれて活動したのかというと、そこには明らかな差異があつた。この差異について、すなわちその当然の質のちがいこそが、プロレタリア文学とアナキズムの文学との根底からのちがいを証拠立てるものである。それを明らかにするために「アナキストの文学とアナキズムの文学」という考え方を提出してみるのである。

歴史的に言えば、労働者農民の階級的な文学運動の初期のものとして『種時く人』(大正十年―大正十二年)があり、つづいて『文芸戦線』(大正十三年―昭和七年)のある時期までは、すでに革命運動として対立しながら文学の運動のなかではアナ・ボル共同戦線がまだつづいていた。

だがそこからアナキストが脱退することになつた直接の動機は、大正十五年(一九二六)十月に

青野季吉が『文芸戦線』にかいた「自然生長と目的意識」とそれにつづく「自然生長と目的意識再論」(一九二七年一月)であった。

「プロレタリアの生活を描き、プロレタリアが表現を求めることは、それだけでは個人的な満足であつて、プロレタリア階級の闘争目的を自覚した、完全な行為ではない。プロレタリア階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち階級意識によって導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてここに始めて、プロレタリア文学運動が起るのである。」

プロレタリア文学運動は、それであるから、自然発生的なプロレタリアの文学にたいして、目的意識を植えつける運動であり、それによって、プロレタリア階級の全階級の運動に参加する運動である。」「(自然生長と目的意識)

「プロレタリアの文学運動は、そのプロレタリアの文学に、社会主義的(真に全無産階級の)目的意識を植付けるものでなくてはならぬ。言い換えると、自然発生的なプロレタリア文学に現われた諸々のイデオロギーの混入を批評し整理し、社会主義的目的意識へと組織しなければならぬ。」(自然成長と目的意識再論)

「ただ私は、レーニンが説いているように、プロレタリアの自然生長には、一定の局限があると信じている。プロレタリアの不満や、憤怒や、憎悪は、そのまま放置されては決して充分に批評され、整理され、組織されるものではない。即ち社会主義的意識は、外部からのみ注

入されるものであると信ずる。我々のプロレタリア文学運動は、文学の分野での、その目的意識の注入運動であると私は信ずるのである。」(同前)

レーニンの有名な論文「何を為すべきか」を文学運動にそのまま転用したと見えるこの論文が果たした役割は、プロレタリア文学はレーニン主義注入のためのものでもなければならぬと主張することであつた。このときからプロレタリア文学はボルシェヴィキの革命指導に従うことを使命とする以外のものではなくなり、大正十五年十一月のプロレタリア文芸連盟の第二回大会はアナキスト文学者の除名を決議した。このときから、戦後にまでつづいて論議を残した「政治と文学」の問題がはじまつたのである。

この青野季吉の論文をきっかけとして大正の最後にアナキストたちはプロレタリア文学の共同戦線から退き、すぐ若いアナキストによって文芸解放社が結集され、機関紙『文芸解放』の発行となり、やがて関東社会芸術家連盟を発足させようとした。文学集団をつくり、機関紙を出し、地域的に拠点をもち、各地域のそれを連合する全国的な文化組織を企画したのであるが、文学者芸術家だけの組織ということに疑惑が出て中絶し、これと前後して同人のなかからマルクス主義への転向者も出て、昭和二年の末までに機関紙を十一号まで出したところで、威勢よく出発した文芸解放社も解体した。

以後『黒色戦線』『黒戦』『アナキズム文学』『単騎』『黒旗は進む』『矛盾』『弾道』などの雑誌が出没断続したが、昭和八年まで全国的な団体は結成されなかつた。その第一の理由は、

集団をつくって文学・芸術の活動を展開するという運動の在り方に途惑いがあったからである。反マルクス主義という以外に文学それ自体の主張が明瞭でなかった上に、いわゆる純正無政府主義の主張にかかわる組織否定論の影響もあった。

プロレタリア文学の魁としての労働文学などが注目されはじめたのは大正期に入って労働運動や社会運動が力づよくなってからである。それはまた新興文学の名でも呼ばれた。社会運動についていえば、ロシア革命が労働者と社会主義者を鼓舞し、アナキストとマルクス主義者がまだ対立をそれほど激化しない頃、いわゆるアナ・ボル共同戦線の時期であった。やがてロシア革命をめぐってアナ・ボルの対立がはげしくなり、アナルコ・サンジカリズムが労働者のなかに浸透してゆくとともに、労働運動にもアナ・ボルの対立の時期を迎えたが、文学運動では大正期がおわるまで共同戦線の時期がつづいていた。

昭和に入つてのアナ・ボルの文学活動は、その後の数年間、後者がプロレタリア文学運動を隆々と盛上げたに比べて、アナキストははなはだ振わなかつた。共同戦線の放棄以後自前の集団的組織活動として何故停滞したか、それは前述の理由によつても考えられるが、文学と文学運動とに即していえば「アナキストの文学とアナキズムの文学」ということに要約される問題があつたのではないかと考えられる。そのことを大正・昭和におけるアナキズム運動と文学のかかわりとして改めて考えてみたい。

ロシア革命をめぐつて大杉栄と山川均をそれぞれの陣営の中心としてたたかわれた大正期のアナ・ボル革命論争のように、昭和に入つてからのアナ・ボルの文学論争は派手なものとはならなかつた。このことには、すでに相互の力の懸隔という事実の他に、プロレタリア文学とアナキズムの文学の質的相違を考えさせるものがその理由として存在する。

大杉栄と荒畑寒村によつて大正改元の初つぱなに出された『近代思想』は、弾圧を考慮して慎重に出発したが、明治大逆事件後の冬の時代からの脱出を目ざした積極的な社会主義運動のノロシとして、単に思想・文芸の雑誌としてではなく記憶されている。したがつてその表面の文学評論誌としての性格は、そのためのカモフラージュとしてやや軽視されがちであるが、大正初期におけるこの雑誌が与えた文学的刺戟には見すごしがたいものがある。その『近代思想』に協力した宮嶋資夫、安成貞雄、山本銅山、佐藤緑葉、安成二郎らの仕事は、後のプロレタリア文学やアナキストの文学との関連の上で、どのように評価され、位置づけられるべきものであろうか。それは昭和のアナキストらの文学が、『文芸戦線』『戦旗』によるマルクス主義者の文学運動のように政治とのかかわりの下に置かれなかつたにしろ、反政治の思想たる「アナキズムの宣伝扇動のための文学運動」のように考えられる傾向があつたことに比べて、はるかに異質であつた。この底流には「アナキストの文学」と「アナキズムの文学」として比較考察されるべき歴史的な、そして本質的な問題が潜んでいる。

その二つのものともにアナキストの書いた文学ではあるが、書く者たちの文学にたいする意

識において、アナキストの文学とアナキズムの文学という質的傾向のちがいがあり、それはまた

文学運動ということにかかわって根本的な差異となるべきものである。このことをはっきりとらえる前に、それをとらえるために、大正にはじまった社会主義者の文学の健康な進展が昭和のナツプに代表されるプロレタリア文学に至る過程であったと考えたがる幅の狭い必然論に必ずしも同調する必要はない、という意見を提出しておく。そうした立場から「アナキストの文学とアナキズムの文学」の歴史的、質的なちがいについて考えねばならない。

平野謙は『プロレタリア文学大系』(一九五五年)序巻の解説で「わがプロレタリア文学がその源流として、いわゆる政治小説、社会小説、社会主義小説を明治から大正にかけて持っていることは、すでにゆるがぬ文学史的定説である」とかいている。必ずしもそれを否定してしまうのではなく、次の意見を強くそこに加えておきたい。ここに平野がいつている文学史的定説というものは、たとえば明治の自由民権運動が社会主義・共産主義の運動の源流である、といった程度のもので、それは現在においてはその連関性を強調するよりも、歴史的事実的相違を明らかにすることの方が今日の問題として重要である、というようなことと似ている。いわゆるプロレタリア文学の人ではない作家の「批判的リアリズム」の作品のなかに「プロレタリア文学に優に比肩し得る立派なプロレタリア小説といつていいものがある」という平野の言い方などがどこから発するのかを考えてみれば、次に私が補足的な意見を加える意味も理解されるだろう。

青野季吉がマルクス主義者中心のプロレタリア文学運動からアナキストその他を締出す目的で

かいた「自然生長と目的意識論」が指導的意見とみなされるようなところには、アナキストの文学もアナキズムの文学もない。このときアナキズム系の文学者たちがあわてて、自前の文学集団をつくってアナキズムを固執して彼らと対立の姿勢をとろうとしたことは、時の勢いではあったが、今から思えば、むしろ遺憾なことであったと考えられなくはない。そのときアナキストたちのとった態度の中の、政治と文学とのかかわり方には深い考察を要する問題があるのである。

プロレタリア文学運動における文学と政治の問題に対して、アナキストはどのようにマルクス主義文学との相違を明らかにし得たのであろうか。それを、

文学→政治思想 (ボルシェヴィズム)

文学→反政治思想 (アナキズム)

という形においてとらえるなら、それはあまりに相似形である。文学が文学以外の思想等にひきずられ、それへの奉仕を強いられるという形において、これはまったくひとしい姿であるといわねばならぬ、労働文学あるいは広義のプロレタリア文学がマルクス主義一辺倒の姿に墮してゆく過程において、そこから離脱したアナキズム系の文学者が文学集団をつくって出発するに至ったのはまだいいとして、文学によってアナキズム的啓蒙を考えたり、思想宣伝の手段の一つと考えることが強くなった事実には、反省を強えられるものがある。

アナキスト文学者の集団がつくられたのはボルシェヴィキの文学集団と対抗するためであった。然らばそのたたかいはどう展開されたのか。というのは、それはどこまでも文学そのものに

よって争われねばならないはずのものが、文学によって争われなかったのではないか、という疑惑をのこしているからである。このことを究明するためには、その前に次のことをはっきりしておかねばならない。

『近代思想』（一九二二—一九二四）以後大正期のアナキストの書いた文学と、『文芸戦線』からの離脱後の集団『文芸解放』出現後の昭和のアナキズム文学との相違と区別を考えておきたいことである。傾向としてこの二つのものにある対立を見、この前者を「アナキストの文学」といい、後者を「アナキズムの文学」と考えることによって、この問題にたいする私の視点はようやく定まろうとするのである。

そして、ひとしく反政治、反権力を根底の思想としながら昭和の「アナキズム文学」とその運動は、文学の軽視乃至否定にせしらずに近づいたことで、意外な誤りを犯そうとしたのではなかったか。これまでこの問題がかかる角度から論じられようとしたことは恐らくなかったであろうが、このことが、文学においてアナキズムがボルシェヴィズムに論争を挑む力のはなはだしく弱かったことの深い理由となっていたのである。

私は、大杉栄に始まる大正の「アナキストの文学」が思想の啓蒙と宣伝の文学ではなかったということを重く見ることによってのみ、後の昭和の「アナキズムの文学」と区別しようとするものでない。『近代思想』をその時期の注目すべき文芸思想誌とした大杉のいくつかの論文のなかの一つに「奴隷根性論」があり、次のような主張が展開されている。

「強者に対する盲目の絶対服従、これが奴隷制度の生んだ一大道徳律である。」

「主人に喜ばれる、主人に盲従する、主人を崇拜する。これが全社会組織の暴力と恐怖との上に築かれた、原始時代からホンの近代に至るまでの、ほとんど唯一の大道徳律であったのである。」

「政府の形を変えたり、憲法の条文を改めたりするのは、何でもない仕事である。けれども過去数万年の間、われわれ人類の脳髓に刻み込まれたこの奴隷根性を消え去らしめることは、なかなか容易の事業じゃない。」

と指摘して、それが万邦無比の美しさを持つとされた日本人の、君と国への忠節すなわち奴隷根性—服従の精神であることをつよく説いた。また「征服の事実」という論文のなかには次のことがいわれている。

「社会は、少くとも今日の人の言う社会は、征服に始まった。——社会は進歩した。征服の方法も発達した。暴力と瞞着との方法は、ますます巧妙に組織立てられた。政治！ 法律！ 宗教！ 道徳！ 軍隊！ 警察！ 裁判！ 議会！ 科学！ 哲学！ 文芸！ その他いつさの社会的諸制度！！」

「敏感と聡明とを誇るとともに、個人の權威の至上を叫ぶ文芸の徒よ。諸君の敏感と聡明とが、この征服の事実と、およびそれに対する反抗とに触れざる限り、諸君の作物は遊びである、戯れである。われわれの日常生活にまで圧迫して来るこの事実の重さを忘れしめんとす

る、あきらめである。組織的瞞着の有力なる分子である。」

このようにはげしい反逆的な言葉を、大杉は自然主義がまだ主流的に存在していた日本の文学と文学者につきつけたのである。自然主義の名による卑小な個人主義—個人の不平不満を述べ、不幸を述べ、決して個人の運命を圧迫する社会、社会を支配する権力、とその組織には目もくれようとしなかったわが国の文学的趨勢に対立したのである。

しかし、かかる傾向を後の「アナキズムの文学」の活動と比べて見るとき、大杉の発言が意外に文壇的であるかに見えるところがある。後のプロレタリア文学の時代には、文壇をブルジョア文学の場と見てこれを軽侮して別の文学活動圏を設定するかに見えながら、事実の上では文壇へのプロレタリア文学者の登場ということになっていた。文学の活動は、左翼的であると芸術主義傾向であるとを問わず、わが国の文学圏というものの埒内に終始せざるを得なかった。文学に関する発言は、その圏内の事実に向けられ、その専門の場で討論されることがもつとも反響があり、効果あるものでしかなかったのである。

大杉栄の発言が文壇的であったことは当然だったのであり、記憶すべきことはそういうことよりも昭和の初期から戦中戦後にわたってわれわれが遭遇した「政治と文学」とのかかわりを、この早い時期に彼がどのように意識的にとらえていたであろうか、というところにある。

私が提出しようとしている「アナキストの文学」ということはそれとかかわつてのみ考えられることである。「個人的思索」のなかで彼にはまたこんな発言があった。

「いかに自由をふり廻したところで、その自由主義そのものが他の判断から借りて来たものであれば、その人はあるいはマルクスの、あるいはクロポトキンの、思想上の奴隷である。社会運動は、一種の宗教的狂熱を伴うとともに、とにかくにかくのごとき奴隷を製造したがるものである。僕等は、いかなる場合になつても、奴隷であつてはならない。」

クロポトキンの思想にたいしてもその言葉を金科玉条とするのではなく、何ものからも自立して、わが思想を持って、ということである。自己自身で立てということを強調しているのである。大杉が社会的個人主義といつて個人の自由と自主とを常にその主張の基盤としていたことが思い出されねばならない。

文学・芸術における大杉の根本的な思考は、ここに一個の革命思想がある。革命のための革命運動がある。文学も芸術もそれを助け、それに協力し、その革命の思想に殉ずることを芸術・文学の目的として、革命のためにその全機能を捧げねばならぬ。"ということの軽々しさに反対するものとして成立していた。労働運動も個人生活も、その革命思想とのかかわりは右に述べた芸術と革命とのかかわりと一つのものでしかない、ということになる。

労働運動において労働者の自主自立の思想に基ずくアナルコ・サンジカリズムを主張したことも、文学において被征服者としての民衆の階級的立場を認識する者として、芸術家は憎悪と反逆の美を創造すべきである、と唱えたのも根本はまったく一つであった。

昭和のプロレタリア文学の時期には、プロレタリア文学者を指して「解放運動の特等席に座す

るものだ」などという意見があった。文学芸術をやりながら、それこそが解放戦線に必須な役目であるとの俗見が存在したことを思い出させるものだが、それは解放運動においても大きく分業することの前提があるということである。これをいいかえれば、前衛部としての党が存在し、党の中に指導部があり、その政治的指導方針に芸術も文学も、労働運動も、その他の活動も従わねばならないという默契の下に置かれていたということである。そこから文学はそのテーマから表現の様式の問題に至るまで、その指導方針に従属せねばならぬということが惹起する。事実、昭和のマルクス主義プロレタリア文学運動には、そのようなことが起った。そして運動の形態、作品の書き方とその批評にまで、党が指示する方針にこれ従わんとすることが、階級的な文学の建前であるといわれるまでに至った。あるいは革命国家ソ連の国内事情によって変遷した弁証法的創作方法とか、社会主義リアリズム等々が、後進国に輸入されて当然のように日本の芸術指針となるという状況が怪しまれもしなかつたという、ていたらくにまで至った。

そのとき、それに服従する芸術家の創造活動、創造精神というものは行方不明であるしかなく、つたであろう。あるいはその行方不明を自覚し得ない似而非なる芸術家詩人は、指示された方針に沿わんと努力することのなかに、解放運動のための献身による自己安堵を得たかもしれないが、出口の失われた芸術的創造精神を自己の中で如何に処理し得たであろうか。それは階級的良心とか、階級的献身とかいう奴隸的精神にとつてかわれたのであろう。清算とか洗脳などという見事な表現によつて。そしてこのような現象こそ、もつとも非人間的で非芸術的な状況だと知らねば

ならない。

革命ということのなかに、民衆個々の自己革命を軽視あるいは許さぬものがあるとしたら、そのような革命が革命であり得ないなどとは今さらいうこともあるまい。あるいは封建的な、あるいはブルジョア自由主義、さらには多数決万能の日本の戦後民主主義に狎れた民衆個人の人格が、革命社会に、姿も中味も変えずに存在し得ると信ずるとすれば、バカバカしく恐ろしいことである。アナキストにとつてアナキズムと文学との関係は、革命のための文学などということではなく、文学も生活も変愛も、働くことも、それに対して自由に、反奴隸的に対処することこそが革命の方向において各個人を、だから民衆を、啓発し、自発せしめ、前進させるものでなければならぬのである。革命運動があつて、別に生活があつて、創造があつて、というような形態を考えられないのである。それぞれに能力的な得失があるにしても、個の生活の拡充という面からも、政治にも芸術にも労働に対しても無縁ではない建前が、考えられなければならないのである。自己を、集団にも社会的権威にも政治的あるいは芸術的権威にも従属させず、自己の個性の發揮と伸張との方向において自由であることこそが革命的であり、革命のための存在だということになるのではないか。

これはまた、いわゆる革命運動と文学活動とが主と従でもなく、対立して相許さぬ二つのものでもない、そうあつてはならないということである。

したがって「昭和のプロレタリア文学運動にまで発展した、階級運動のための文学運動という

考え方」とは、そのはじめから質的にはかけ離れているものでなければならなかった。これは大杉栄らがわが国にプロレタリア文学が強力となる時期以前の文学的発言者であったということのためではなく、ボルシェヴィキの革命思想とアナキズムとの質的根底的な相違によるものであったと思う。だから昭和に入ってアナキストの作家や詩人の集団の活動が表面にあらわれたときから、「アナキズムの(ための)文学運動」といった形をとりはじめた以後の、アナキスト等の文学と、『近代思想』に拠って展開された文学論、すなわち「アナキストの文学」観とは、ふかく質的相違が考えられそうだという判断も生じ、昭和はじめの若いアナキストの活動をやや区別して「アナキズムの文学」と呼ぶべきだと考えるのである。

村松正俊、松本淳三、新居格、宮嶋資夫その他のアナキストらが『文芸戦線』及び「日本プロレタリア文芸連盟」と關係を絶つたのは大正十五年、翌昭和二年一月一日付で『文芸解放』が創刊されて、やっと文学におけるアナ・ボル対立の時期に入ったのである。そのすこし前にもう一つ『文芸批評』というアナキスト中心の文芸同人誌もあった。新居格、宮嶋資夫、高群逸枝、麻生義、川合仁、松本淳三、加藤一夫らが名をつらねており、大正十四年から十五年に亘って存在したが、反マルクス主義的ではあったが、まったく性格の弱い集団に終つた。また雑誌『解放』に拠って大正十五年五月に日本無産派文芸連盟が結成され、小川未明、松本淳三、新居格、村松正俊らが集まったが、文学集団として反マルクス主義の旗幟を立てながら、活動は活発とならぬままに終つた。ともに噴出するエネルギーに欠けていた。ひとり『文芸解放』には新鮮さと若い

意欲があつた。その意欲はボルシェヴィキの文学運動と正面から対決することを当面の任務と考え、それに集中する姿勢に終始したのである。

その主要なメンバーは飯田豊二、萩原恭次郎、麻生義、小野十三郎、川合仁、岡本潤、土方定一、壺井繁治、工藤信、柳川槐人、野川隆、金井新作、江森盛弥らで、外から石川三四郎、新居格、宮嶋資夫、和田信義、吉田金重らが協力した。この集団結成の動機は「目的意識論」すなわちボルシェヴィキの政治主義文学論に対立するものであったから、それにたいする反論抗議が『文芸解放』の紙面を埋めているのは当然であつた。

しかし思想運動、労働運動においては数年以前からのアナ・ボル論争があつて対立をきびしくしていた時に、文学のみに共同戦線が在り得たことは当時としては遅れた情況だったのである。この時期の文学の問題は、だからアナ・ボル論争というよりも「プロレタリア文学を、ボルシェヴィキ的政治陰謀の一翼にしようとする悪煽動文学の企図は、明確なる正統無産階級の認識の前に、正体を曝露するであろう。彼等はその陰謀の遂行に急なるあまり、正統無産階級意識、アナキズムの認識にたいして、種々なるザン誣中傷と逆宣伝を試みた。」(『文芸運動の新転機』麻生義と主張するところにあつた。あるいは)

「今一つアナキズムへの笑うべき抗弁は、アナキズムを単なる個人主義であるかの如く想定して、社会性のないということに集中する。」(同前)

「プロレタリア文学者が、その把持する社会思想によって、袂を分かつたという一つの、最

近の事実は、正しき意味の文芸と非文芸との離反、悪煽動—強権主義者と正統無産階級意識との訣別を意味している。」(同前)

と書いたとき、イデオロギーとしての対立、文学運動組織における対立、政治と反政治の対立等を明確にした。政治と文学の問題が昭和の戦前戦後を通じての課題となったことにたいして、一貫するアナキストの姿勢がこの時に明らかにされている。つづけて「何が作品の価値を決定するか」という重要な論文も書かれた。

「自然生長と目的意識論も、要約すれば『何が作品の価値を決定するか』の問題に帰着する。青野氏の『自然生長と目的意識』再論なるものも、その言説前後矛盾する点が多い。自然発生的要素の是認のあとへ目的意識の強弁が平気でくっついているなど醜態である。」(小野十三郎)

「彼等の仲間の多数は、自己批判の欠如と現実に対する怠慢から先ず社会主義者たることを無視して一足飛びに所謂社会主義作家におさまってしまった。単なる学究的マルキストからただちに作品に飛躍するのである。同時にマルキシズムのイデオロギーが作家の価値批判の原理から作品の共同的な指導原理へと一躍する。何が作品の価値を決定するか。共産主義的社会観の有無、目的意識の有無である。既に真の社会主義者にもあらざる社会主義作家を指導し統制するためにはそれはまことにいい方法、それは盲目的なボルシェヴィキを狂喜せしめる。」(同前)

文学作品の価値が政治的イデオロギーの高揚と宣伝にあるという風潮が、ボルシェヴィキの文学主張とともに流行しはじめたとき、それを否定して、文学と政治とのかわりを、主人と奴隸との関係としてではなく把握せんと試みた、逸早い発言として記憶に値するものであった。

当時もつとも戦闘的な詩人といわれた萩原恭次郎は、アナキズム文学とは何か、ということについての考察を次のように書いている。

「アナキズム文学の宣揚は純粹なるアナキズム思潮の明確なる宣揚よりはじまる。——まず、アナキズム文学の文学的出発は、それ自身最も文学であり得ることを、何よりも最先きに宣揚しよう。さらにブルジョア文学とボルシェヴィキ文学とに対して、真に人間の根本に立脚しようとする文学に就こうとする文学であることを宣揚しよう。

文学の製作は個人の文学的才能の高頂によって、発生せらるる以外の何物でもない。」(「アナキズム文学の一断面」萩原恭次郎)

「この、個人の文学的才能の高頂」によって、過去幾多の天才と呼ばれた多くの小説家・詩人を我々は数えることが出来る。

これらの歴史が我々におしえるものは、天才たちは、当時の社会的情勢に対して目覚め、何らかの批判と解剖とをそなえているのである。——我々の文学は社会の全機構に目覚め、よく社会の動向を解放戦に向わしめる手順を持ち、真のプロレタリアの一員であることによって我々は、そして我々の階級が何を欲しているかを芸術的情熱の下に表現しなければならない。」

ここには、個人主義的なものよりも社会主義的、あるいは無産者の階級的連帯感を重く見る文学主張が、つよく主張されている。

『文芸解放』の時期、その指導的理論家として有力な存在であった麻生義の意見にも、青野季吉の「自然生長と目的意識」におけるボルシェヴィキ的政治上位の見解に反対することにいそがしく、個のための主張、社会の主人は個人である人間というアナキズムの根本的思考の一つが、やや側面に置かれての論調が強く見えているようである。次の如きがそれに当るだろう。

「芸術は生活の潑刺たる姿態だ。アナキズムの社会——自由連合の社会生活のないところには、搾取と強迫と階級社会の存するところには、如何にしても典型的なアナキズムの芸術は存在し得ないであろう。この点から云って今は、我々が、アナキズムの芸術」と呼ぶところのものは、アナキズム社会を意欲する芸術、もしくはアナキズムの理想を内容思想とする芸術に、限定されなければならない。アナキズムの理想を追求する正統無産階級と結びついている芸術、行動と破壊の芸術の間から、アナキズムの社会における芸術は次第に成長するであろう。」(如何にしてアナキズムの芸術は確立し得るか)(麻生義『文芸解放』第五号)

なお文芸解放社は四つの宣言をもっていた。

- 1 我々は過去一切の歴史と絶縁し、新しき我々の歴史を創造する。
- 2 我々は一切の屈從的精神を排撃し、自由合意による連帯社会を創造する。

3 我々は詐欺的政治運動から文芸を解放する。

4 我々の文芸は自然発生に拠る目的意識を強調する。

ここで考えてみたいのは3と4である。4は、「自然発生」ということがボルシェヴィキ的「目的意識」の強調によって否定されようとしたことにたいする当然なるアナキズム的な主張、3は、アナキストの文学集団がつくられたことの眼目はここにこそ、というべきものである。

アナキストがアナキズムの立場を文学活動のなかで明らかにするためにこれ以上恰好な項目は他にない。事実これは戦後に至ってまで一貫して、文学についてアナキズムがその主張を他の社会主義的諸思想と隔絶するため、この上なく必要な条件であった。

文学は政治と政治運動を他の社会的、個人的出来事とともにこれを対象とし、また材料として取扱う。それは政治を否定するにしろ、重視するにしろ、現実にはわれわれを取巻いて現存するものだからである。こちらから行かねば向うから来るもの、と正しい程身近くあるものである。その故にこそそれを否定する条件も備えているものである。しかし、政治は社会を動かし、あるいは支配しているかに見えるとしても、文学がそれに従属すべき義務はない。政治を批判し、否定する者、それを肯定し従属し、称揚する者、それらが如何にあろうとも政治は文学と同等以上のものではない。ともに人間が在り、社会があり、生活がある、そのことのために存在しているものでしかない。そしてまた個人にとって政治も文学も、社会も、自己以上のものではなく、自己がある故にそれらも在る、というもつとも徹底した個人主義を喪失したとき、個が階級

や民族や社会や国家にいささかでも従属するものであるという考えがひらめくとき、アナキズムは後退的地じりをはやめる。「政治運動から文芸を解放する」とは、また同時に文学は他のものによる制限からも解放されていなければならず、何ものとも対等に在り得ることによって、政治と対立し、それを否定する声もあげることが出来ようというものである。

「アナキズムは個人主義である」と批評されることにアナキストたちもしばしばたじろぎ見せることがあった。「自然生長」といわれることにたいする反撥として、自然生長が個的でなく社会性の深いものであるという弁明をしたがる心弱さについて陥りもしたのである。

「芸術におけるアナキズムの情感は、社会的共感である。社会からの自己隔離や逃避はいかにしても、アナキズムの情感ではあり得ない。アナキズムの芸術理論は、アナキズムが情感として、社会的共感性に基づいているところに重大な力点をもっている。」(同前)

この見解を私は否定せよというのではないが、個人主義的即非社会的という非難をアナキズムに向けるマルクス主義的発想にたいしてこのように回答してしまつては、アナキズムが個の自由を、階級の解放という大義名分の下でもそれを犠牲にしないという建前からは後退的姿勢を示すということにならないか。そこからさらに、党のため、階級のためには、個人を犠牲にして悔いなく政治的革命運動に一步近づくことにならないか。その不安がこの論文の中にすでに仄かに姿を見せはじめている。

「正統アナキズムの精神は、現代においては、最も客観的な唯一の無産階級の精神である。

究極の目的——理想を把握して、科学的に、階級対立の社会制度を艾除しようとする。そこには、社会的正義を追求する熱情と、個人の自由を獲得しようとする闘意が生れる。従つて、内に充溢するアナキズムの認識は、芸術的領域においては、当然、アナキズムの認識を随伴する芸術を、生むことが出来るであらう。」(同前)

「この場合の『彼は』勿論、芸術的才能を持ち合わせた人でなければならぬ。こうして、我々の云う、新しい型の労働者、が現われるであらう。その労働者は、現代においては革命家もしくは戦闘的労働組合員、特殊な労働に従事するアナキストであるとともに、『彼』の享有する情感と智能の発露を、科学、芸術などの局面に求めている人だ。智的生活と、情操生活の一致した新しい型の労働者は、未来社会の理想的な構成員でなければならない。」(同前)

かかるエリート意識の裏に潜入する権威主義的な思考には、ここでアナキズムの芸術を打建てるために努力研鑽している限りでは不安らしいものは見出せないとしても、さきに述べた「アナキズムの情感は社会的共感である」と確言するとき、その身辺に思わざる危惧が迫っている。それは個人を社会のためという大義名分のなかに没落させるに至る思想であり、さらには文学を革命運動のためにそれへの没入を止むなしとするに至る思想となるからである。これは、反政治的思想を掲げながら、その反政治的アナキズム思想とその運動のために、文学、がいけにえとされるかもしれないことを、忘却しかけた思想である。アナキストたちもしばしば、アナキズムが個人主義的である、エゴイズムである、非社会的である、という非難にたじろぐことがあった。前

に掲げた麻生義の主張など、対ボルシェヴィキとの論争のなかで自分からその陥し穴に片足つこんだ感がある。個人^々の強烈な主張が一方にあり、それが反政治的思考につながるものであるという自覚を明らかにしておくことである。反政治的立場であることの主張のために、文学がその主張に殉じ、個を忘れて社会性を強張しようとするところに「アナキズム文学」の、ある危険を痛感したものは当時まだ少なかった。

ボルシェヴィキ的プロレタリア文学に対立し抗争するために、文学も個人も犠牲にしてみなぬという暴力的思考は、昭和はじめのこの時期にしばしば出沒していた。反ボルシェヴィキ即アナキズムという端的な思考に要約されるあまり、何でもその反対、という気流が濃くアナキズム陣営を覆ったところである。それはいわゆる純正無政府主義が提唱されて、革命に到達するための直接の運動以外は、労働運動も組合も啓蒙活動も、一切の組織づくりも、反革命であるとして否定されつづけた時期であった。

アナルコ・サンジカリズムの労働組合も、それが組織体であるかぎり中央集権であり、反革命的であり、ボルシェヴィキ的であり、撲滅せねばならぬという論理が、論議をつくさずして、一方的に暴力的に押しつけられるという時期であった。すこぶる観念的色彩の濃厚な、その実、非活動的なアナキズムが流行した一時期のことである。現実的とはいえないこの観念論に文学が呼応したところから、反政治の叫びをあげることのみが反ボルシェヴィキとしてのアナキズムの文学の仕事であるかのように考えられて、前に示したような図式、反政治思想→文学、すなわち

アナキズムというパターンが出来上がったのである。

反政治思想を鼓吹してボルシェヴィキと対立することのみがアナキズムの文学の眼目であるかのような受けとり方は、ボルシェヴィキが思想運動、文学運動を席卷しつづけているとき、われわれが陥ち入った必然的かとも見える傾向ではあったが、しかし文学と個人、文学と階級闘争、文学と政治、について考えるとき、何故に反政治思想鼓吹のための文学までを否定するのかという問題として、アナキストからさえも反問された。文学はそれ自体の自立する活動であらねばならぬという、いとも見易い道理が混乱したのは、当時若いアナキスト集団の中の階級、権力、政治等についての、アナキズム的思考の弱さと不徹底さを示すものであった。

「プロレタリア文芸運動の役割について、コムニスト一派の間にも様々の異論があるようだが、その文芸理論の中心問題は『文芸運動を無産階級的政治闘争に合流せしめよ』ということの上にかかっている。いづれにしる文芸運動をもって無産階級的政治運動の一翼を直接分担するものであると考える。我々は、それによって無産階級が真に解放せられるものの如く約束するところのボルシェヴィキの偽瞞的政治運動の正体を曝露すると同時に、文芸戦線において、かかる政治運動に合流し、自らその一翼たらんとするところからのコムニストの文芸運動に対しては、断乎たる抗争をつづけなければならぬ。——我々は『全無産階級的政治闘争』という巧妙な仮面と策略によって辛じてこの破壊の手を免れつつあるブルジョアイデオロギーの残党どもに寛大であってはならぬ。」(文芸運動は何を為すべきか「小野十三郎」)

「我々の文芸運動がやらなければならぬ一切のブルジョアイデオロギーの積極的徹底的総破壊は、当然ボルシェヴィキの政治行動を否定し積極的に彼等と闘わねばならぬ。彼等がもしプロレタリア文芸運動が全無産階級政治闘争の一翼を直接分担するもの如くいふらすならば、我々は反対にプロレタリア文芸運動はいかなる意味においても『政治』とは絶対に交渉なきことを明らかにしなければならぬ。即ち政治否定を大きく標榜し、無産階級をして正しい認識を把握せしめねばならぬ。この場合我々はその文芸運動の『文芸』にこだわることはない。我々の文芸運動は一切のブルジョアイデオロギーの排撃、徹底的総破壊運動であることによつて、啓蒙運動としての創造的一面をもたらずものである。」(同前)

ここまでは問題として明確である。反政治がアナキストの文学の当面のテーマたることは当然である。しかし「文芸運動が『文芸』にこだわることはない」といつてしまつては、「文芸にこだわらねばならぬ」という反論もせざるを得ない羽目になってしまう。ブルジョアイデオロギーの破壊を、如何にするか。その仕事、すなわち革命運動の全体的なものの部分として、それ自体の文学運動は存在するのである。部分とは、文学の活動が全体の活動の一部分たり得るということであつて、目的が「部分」を旨ざすということではない。ここでいわれている「政治」とは、文学が文学以外のものに従わぬということの意味での政治であり、特定の方針や圧力にたいして文学は、何者にも従属することの出来ないものである。もし従うべきものがあるとすれば、それは自己であり、自我でのみある。アナキズムの反政治とはまたそういうことである。個人の自由

を、革命運動の目的のなかに、運動の実際のなかに、欠くることなく保持しつづけることを見忘れないことが反政治的活動なのである。

大正から昭和に移した直後の、アナキズム運動が、アナルコ・サンジカリズムと純正アナキズムとに對立して、対外的にはなく対内的に相剋して勢力を失いつつあつた時期の文学運動が、反政治を建前として、反政治的主張に従わねばならぬとしたことには、同時に反省がなかつたわけではない。それは、アナキズム文学運動の中において「アナキストの文学」という思考を忘れ去つてしまわなかつたからであつた。

「我々は一つの目的によつて、即ちアナキズムによつて我々の文芸運動を進展せしめんと欲するものであるが、そのために、アナキズムによつて作品そのものを指導する必要を毫末も認めない。何故ならば我々の文芸は思想を盛るためにあるのでなく、思想を生きたところにあるのである。アナキズム文芸とはとりもなおさずアナキストの文芸に他ならない故に、我々は芸術家である前に、まず一人のアナキストたることを欲するのだ。」(同前)

このように一部にかなり明確な自覚もあることはたしかにあつた。しかし、この時期の全体的な雰囲気としては「私は雲雀のように歌っている他には何も出来ない人間らしい。実行運動へゆきたい衝動を常に感じるけれど、そしてもし自分をアナキストと呼ぶならば、実行運動へゆくのが本当だと思ふけれど、やはり私にはそれが出来ない」という理由による脱退者が出てきたように、アナキストが文学をいわゆる實際運動の下僕のように考えたものがひろがつていた。こ

これは「アナキストの文学」としてではなく「アナキズムの文学」すなわちアナキズム運動のための文学、プロレタリア解放運動のための文学、という思考形態から離れることの出来ない者たちが、実際には多かつたことを語っている。小野十三郎の言葉のように「アナキズムによって作品そのものを指導されない」「されてはならない」といった考え方が述べられながら、実際運動と文学運動、革命の運動に従うべき文学運動、という考えから「アナキズムの文学」も脱出してしまっていたのが、アナ・ボル共同戦線分裂後のアナキズム系文学の傾向であった。「革命のための文学」ということが左翼文学一般の思考のパターンであったのだ。

アナキズム思想とかわる文学活動は、大正初期の『近代思想』の、殊に大杉栄における、革命も文学も生活もトータルに自我によって捉えるという行き方がその発端にあった。そのときアナキズムとして当然のことにすぎないが文学と政治は対等であった。これを「ボルシェヴィキ的革命と文学との問題」に比べて見ると、政治権力を把握して、社会を改造して、という順序立ててやるボルシェヴィキ革命の性格は、当然にその変革の各時期の政治的方針の変化に沿って描くことが文学の革命的活動ということになり、その間社会革命の根本である「人間」のことはかわらぬ、革命のための非人間性が当然要求される。はっきりと革命運動に従属することのみが文学の使命となる。政治とはちがったかわり方で人間のために、あるいは人間の自由のために存在してきた文学の命脈はそこで断絶する。アナキストが政治と文学の問題で、ボルシェヴィキ的方法に反対してきたのは、文学が文学でなくなることに對してであった。反政治、反権力の

立場はこうしてのみ明らかとなる。だが、くりかえすことになるが、反政治、反権力の主張と活動とが非人間的になることがもしあるとすれば、アナキストの文学はそれともまた本質的に対立しなければならぬ。個人主義とか、非民衆的とか、反革命とか、その場合に投げつけられる常套の言辭を顧みることはない。

アナキズムのための文学ではなく、アナキストの文学だ、と考えることでこの問題にかかわる懸念は解消するであろう。

つけ加えたいことがもう一つある。昭和二年から昭和十年までのアナキズムの文学運動は無政府共産党の大検挙で中絶したが、戦争を経て戦後の民主主義の時代にアナキズムの文学運動というべきものが甦生しなかったことの理由は何かということである。明答することはできないが、私なりにこう考える。共産主義のための文学運動というものもその時はなかった。民主主義日本のなかに社会主義諸派の文学運動の対立が一時解消するかに見えたからである。民主主義統一戦線という政治的路線が叫ばれ、ボルシェヴィキも社会民主主義も文学活動の上では新日本文学会に大同集結するという形がとられ（これは旧ナツプを中心勢力とする文学の共同戦線によって戦前よりもさらに広汎な文学者集団を日本共産党が党外大衆団体として指導支配する目論見であった、と私は今考えている）、少数のアナキストもそこに加わっていた。

かくして、かつてボルシェヴィキの文学運動との対立を主な動因として出発したアナキズム文学集団の存在理由は解消したごとくであった。だから向井孝、高島洋、崎本正、山口英らが集ま

った「イオム同盟」のようなグループを別にして、ほとんどアナキズムを標榜するといひ得る集団は戦後は存在しなかつたのである。

昭和戦前のささやかな同人誌や文化団体の経験と、戦後の状況に思い合わせていま、私は一つの結論に到ろうとしている。戦後は、戦前のアナキズムの幾つもの同人誌や全国的な文化団体「解放文化連盟」などがつくられる必然性は甚だ弱かつたということが一つ、もう一つ対ボルシェヴィキの反政治、反権力の提唱が、現在は独立した文学の主張として文学運動の対象となりにくいこと、民主文学などの名を被らせても、ボルシェヴィキの革命指導が文学の指標とはなり得ない現在、アナキズム文学もまた旗を立てるほどの独創的な新しい文学対象となり難い、ということである。

しかし終つたと私がここでいいたいのは、かつてのアナキズムの文学であつて、アナキストの文学ではない。それぞれに現時点に独立し得る人間一個として、アナキストは自己の目ざす文学を持ち、それを主張することは可能である。またそれを進んでやらねばならない。かつてアナキズムの文学は無産階級解放のためという「政治と権力への反抗」ということで成立していた。すでにそれは文学の対象とするよりも、より身近く日常生活の問題となつてわれわれの生活の中にある。そこでアナキストの文学は、大正時代に在つたような、おのがじしのたたくいと表現のなかに道を考えるべきときではないか。

独立自主をたてまえとしながら、アナキストの文学集団があり、それによつてアナキズムの文

学をすすめてきた昭和の彼らは、団体により、またアナキズムに拠つて、意外に自主自立に弱かつた。如何なればアナキスト詩人たちが第二次大戦の進展とともに、平和反戦から好戦のうたをかくに至つたか。また如何なれば戦後、日本共産党の傘下に飛び込めたか。この理由の一端として、集団としての「アナキズムの文学」の活動のなかの自我の卑小を、ふと省みることがある。